

読者に届く工夫を

きどりのりい

児童文学でのノン・フィクション（以下、NFと略す）のジャンルは、特別の存在意義を持っている。生命をめぐる森羅万象、人間が繰りひろげるさまざまな真実のドラマ、社会が抱える問題の解明、その「ほんとう」の物語は、特にこれから社会や環境にかかわりつつ自分自身の人生を歩んでいかねばならない若い人びとにとって必要なものだ。もちろん「虚構」の持つ文学的力が限りなく大きいことは言うまでもない。しかし真実の物語を平易な言葉で語ることの力も、特に児童文学において重要であり、そのためスキルを模索せねばならない。それは、このジャンルの場合、本全体のレイアウトたとえば写真、地図といったヴィジュアルな資料をどのように取り入れ、読者の理解を

助げるか、といった工夫にも関わってくる。そのような基準も含めて、NFやNF的なフィクションの各冊を見ると、神経の行き届いたものと、かなり杜撰なものがあることがわかる。

『月のえくぼを見た男 麻田剛立』（鹿毛敏夫著 くもん出版）は最近のNFの中でも秀逸な作品で、江戸時代に日本の天文学の基礎を築いた麻田剛立の生涯を描いたものだが、幼少の頃から自然界の法則に気づき、天体観測をはじめ剛立の姿が興味深い。ここで、例えば彼が長じて大阪（当時は大坂）に出て部分日食を観測した長堀中橋はどこだろう、と思うと、きちんと地図がのっている。また彼が持参した「尺時計」とはどんなものだろう、と思うと、これも実物の写真がある。彼の発見した月のクレーターの図はもちろんのこと、本全体につけられた挿絵も印象的だ。一方、本作りで対照的なのは『キルトにつづる物語』（アンドレア・ウォーレン著 もりうちすみこ訳 汐文社）で、これはアメリカ開拓時代、中西部ネブラスカ州で少女時代を過ごしたスナイダー・マッカンスの物語だが、当時の状況が克明に語られ、家族を支えて働く子どもたちの姿も興味深い。しかし肝腎の、彼女の人生がこめられたはずのキルトの写真や、本文で触れられている家族の写真がなく（原書にはおそろしく入っている）ネブラスカ州の位置をあらわす簡単な地図しかない。内容はよいが本作りに問題がある例だ。